ひと・まち・自然

トラまちPress

(財) 世田谷トラストまちづくり情報誌

Vol. 8
March 2012

特集

わがまちの歴史的文化遺産

風景の一部になっているまちの宝物を残すには

歴史的建築をもっと身近に。
それは知ることから
堀内正昭

せたがや散歩日和　第8回

中世の遺構が残る世田谷のまちへ

宮の坂駅～世田谷城址公園～豪徳寺～滝坂道～山下駅へ

結び葉　第8回

大江亮一さん

人やモノを結び安心で住みやすいまちにしたい

特集

わがまちの歴史的文化遺産

長い間慣れ親しんできた思い入れのある建物、
ふとした時に心に甦るなぜだか後世に残しておきたい風景、そんな宝物を見つけたことはないだろうか。
歴史的文化遺産の在り方が問われている今、世田谷のまちで、
自分たちなりの宝物を見つけ、それを大切にしていこうとする人々を見つめた。

歴史を物語るまちの隠れた遺産

たとえば、街角にそびえ立つ建造物、かつての川の名残りを残す緑道、大昔から人々やまちを見守ってきた大木…。世田谷のまちを歩いていると、見慣れた風景のなかにひっそりと生き長らえてきたまちの歴史がしるされていることに気付く。そういった失いたくないまちの遺産のなかで、とりわけ厳しい状況に置かれているのが、近代建築と呼ばれる建物の数々だ。世田谷区では、明治時代から昭和20年までに建てられた近代建築が、昭和60年頃は3000棟以上も現存していた。しかしこの30年の間で、相続の問題や売却、建替えなどによって、3分の1程に激減してしまっている。

このような状況のなかで、建物を様々なかたちで守り、活かしていこうとしている人々がいるのも事実だ。思い出のたくさん詰まった家を大切に住み続けていく人、まちの風景を人々の心の拠り所として残そうとする人、歴史的文化遺産を人々が集い憩う場として活かす人…、世田谷の歴史的文化遺産の在り方を問いかける人々の、多種多様な取り組みを紹介していきたいと思う。

尾澤医院（世田谷）昭和4年（1929）頃竣工。
木造2階建ての洋風住宅。病院施設と住居部分を兼ね備えている。かつては医者夫婦と子ども7人が暮らしていた。

柳澤家住宅（大原）昭和26年（1951）竣工。
木造切妻瓦屋根の平屋。9畳の応接間と4畳半の和室、そして玄関にも民家風の意匠が多く用いられている。

駒沢給水塔1号塔・2号塔（弦巻2-41）大正12年（1923）竣工。
鉄筋コンクリート造。設計は中島鋭治。高さ約30m、容積は約2700㎥。塔頂の装飾電球が特徴的。（写真／黒田諭）

成城五丁目猪股庭園（成城5-12-19）昭和42年（1967）竣工。
木造平屋。吉田五十八設計。吉田流といわれる近代数寄屋の住宅と廊下でつないだ茶室があり、スギゴケの庭が美しい。

尾澤医院／柳澤家住宅

模索を続けながら想いを引き継ぐ

歴史的文化遺産として残していこうと、今まさに奮闘を始めているという建物に出合うべく、向かったのは世田谷線の上町駅。世田谷ボロ市の賑わいを背に大通りを進むこと3分、ふと現れる門柱の奥に足を踏み入れると、木造2階建ての洋風住宅、尾澤医院が佇んでいた。かつて病院として地域の人々の生活を支えていたその建物は、玄関前に草花の鉢が置かれ、今も人の手できちんと維持されていることを物語っている。庭には年月の流れを感じる大きな木が立ち、駅前の喧騒が嘘のように静けさが満ちていた。

目を凝らせば見えてくる一族の歴史

現在この建物を維持している尾澤史裕さんが、建物の中を案内してくれた。玄関を入ってすぐの待合室や診察室は、その雰囲気はもちろん、今ではなかなかお目にかかれない貴重な医療用具も一見の価値がある。一家が暮らしていた住居部分の食堂や階段、寝室やバルコニーの設計にも、今の技術では再現できない緻密なデザインが随所に見られる。しかしなんといっても建物のなかで一番に感じるのは、その居心地の良さだ。

父の代から受け継ぎ、現在2代目となる尾澤さんは、なんと7人兄弟の末っ子。この場所で生まれ、大学生になり独立するまでずっとこの家で暮らした。

「どうしても守らなきゃ、って」語る尾澤さんの口調から、当事者だからこそ抱える、建物に対する底深い想いを感じる。

「建物を維持していくのに、いろいろな方法があると思いますし、考えてもいます。だけど、できることなら私たち兄弟で、そして次の世代まで大事に住みながら引き継いで残していけたらそれが一番だと思っています」

建物とは本来、人が暮らすことによってその空間に生気が満ちるもの、つまり人の営みによって建物を維持することは、建物にとって当たり前であり、一番幸せな方法だといえるだろう。

「父はみどりも好きで、昔はもっとたくさん木も生えていました。そのおかげで鳥も来た。みどりって、とても大切な存在でしょう？だから将来的には木をかつてのようにもっと増やして、庭も草花でいっぱいにしたい。そして、建物と一体となったみどりある風景として、地域の人に必要とされる存在になって欲しい」

力強く話す尾澤さんの視線の先には、みどりに囲まれ、人も生きものも自然と集まってくる、そんな在りし日の穏やかな尾澤医院の姿が色鮮やかに甦っていた。

もうひとつ、個人の想いを引き継いでいこうと模索している建物があると聞き、足を運んだのは大原。整えられた生垣に導かれるように進み、どっしりとした大谷石の門柱をくぐると、立派な桜の木とともに、木造平屋建てのどこか懐かしさを感じる切妻屋根の建物が出迎えてくれた。白壁と柱梁の構成、ところどころの装飾に民芸運動の影響を感じる。ここは以前、柳澤君江さんが姉夫婦とともに暮らしていた住宅だ。生前から「この建物、庭をただただこのまま残したい」、そう心から望み、普段からその言葉を常々口にしていたという柳澤さん。その強い想いをどうすれば実現できるか、生前の柳澤さんから相談を受け財団設立の実務を行ったのが、法律事務所で働く石崎奈都恵さんだ。

「初めて訪れた時、ここは残さなければいけない場所だ、と心から感じました。とにかく残したい、という柳澤さんの純粋な気持ちにも突き動かされ、あらゆる手段を考えたのです」

相続税の減免のため、国の登録有形文化財に申請、また、柳澤さんの意思を確固たるものとして後世へと引き継いでいくため、一般財団法人柳澤君江文化財団の立ち上げに奔走した。そんななか、当人である柳澤さんが突然この世を去り、財団としての活動を軌道に乗せざるを得ない方向へと状況は進んでいった。休む間もなく建物や庭を残すための制度を調べ、市民緑地（*1）として庭を開放することも考え始めている。

石崎さんの語らいのなかで一番印象に残った言葉、それは「100年後も建物とこの風景を残したい」という言葉だった。

「周りがどんなに変わってもこだわりは変わらない、そんな風景は、まち単位で行動して初めて残せるのではないでしょうか。いずれこの場所も地域に開き、人々と様々な活動ができる空間として活用していけたら良いと思います」

財団というかたちで膨らみ始めた柳澤さんの夢のつぼみが、100年後も見事な花を咲かせることができるよう、奮闘を続ける人々のバトンは大切に手渡されていく。

100年先も残したい故人の揺るがぬ想い

1.木々に守られるように建つ尾澤医院。ここだけ時がとまってしまったかのよう。2.窓が大きく開放的な診察室。多くの人々が治療を求め訪れたという。3.バルコニーへ通じる踊り場は、明るくて気持ちがいい。尾澤家の子どもたちの格好の遊び場となっていた。4.こぢんまりとした応接室では、家具やピアノが人々との再会を静かに待つ。5.外観のデザインにも、多くの趣向と技術が見受けられる。かつての住人の想いが、確かに息づく。6.柔らかに光が降り注ぐ階段。

右／調剤した薬を渡す窓口。懐かしさ満点。左／モダンな印象のステンドグラス。日常に彩りを添えていた。

1.室内の装飾はもちろん、家具や小物ひとつひとつに建主のこだわりを感じる。2.四季の移り変わりを美しく告げる、手入れの行き届いた庭。3.玄関部分。大谷石貼りの土間が、来訪者を出迎える。

左下／調度品にも民芸要素が。鳥取民芸家具の電気シェード。右下／英国製のウィンザーチェア。

松本民芸家具のバタフライテーブル。（写真／堀内正昭）

*1 市民緑地
民有地のみどり保全と創出を図る「都市緑地法」に基づく制度。土地所有者は、300㎡以上の一団の緑地を地域に公開することで、緑地の維持管理と税制面での優遇措置が受けられる。現在区内10か所で公開。

駒沢給水塔

人を引き寄せ動かす「タワーのパワー」

個人で建造物を残そうと奮闘する人々がいる一方、地域の人々で呼び掛け合い、その地域のランドマーク的な建造物を残す活動をしている会がある。弦巻にある駒沢給水塔を守る、その名も駒沢給水塔風景資産保存会、通称コマQだ。

「最初は『近所にある奇妙な建物』という印象しか、この給水塔には持っていなかったですね」

そう語るのはコマQ発起人のひとりである久野富雄さん。久野さんの家の居間の窓からは、巨大な2つの塔を、手に取るように間近に見ることができる。平成14年に世田谷区で第1回選定地域風景資産(*2)の募集をしていることを知った久野さんは、この給水塔を推薦したら面白いのではないか、と思い立った。しかし募集の選定条件に「コミュニティづくり」とあったため、一緒に事を進める誰かの力が必要と感じ、向かいに住む黒田端さんに声をかけた。さらに黒田さんの呼び掛けで、近所の人々が久野さんの家に集まり、給水塔にまつわる思い出などを楽しく語り合ったという。その時のメンバーが発起人となり、保存会がスタート、その後、公益信託世田谷まちづくりファンド(*3)を活用して、活動を軌道に乗せてきた。年4回の会報誌『双塔』発行のほか、会に若い風を呼び入れ、若者に向けて給水塔を紹介する会誌『そうとう』を創刊するなど、給水塔の周知にも励んだ。人が人をつなぐ楽しさを感じながら活動を進めた結果、当初は30名程で始まったコマQも、気が付けば現在約350名もの会員に力強く支えられている。

駒沢給水塔は大正12年、当時の渋谷の人口急増に伴う安全な飲料水の確保のために建てられた。まるで王冠を被ったかのように見える独特のシルエットが、給水塔の最大の特徴だ。全国に数ある給水塔のなかでも、伸良く寄り添う双子のように建てられた双塔は他になく、老若男女、世代を超えて見るものの心を捉えて離さない不思議な魅力を携えている。コマQではより多くの人々に給水塔を知ってもらおうと、東京都水道局の協力を得ながら装飾電球の点灯や塔の見学会を実施、会自作DVDの上映会などイベントも精力的に行っている。とりわけ見学会は、地域の小学生にも大好評だ。

「価値あるこの建物を、自分たちが住む世田谷の宝物として誇りに思えるように、水の大切さも含めて次世代へと伝えていきたい」

かつて中学校の先生をしていたという黒田さんの目が、優しく微笑んだ。給水塔は、子どもたちの心にしっかりと刻まれていく。

活動から10年。水道局との協力、信頼関係も年々深まり、コマQの活動は着実に実を結んでいる。「塔に住む何か目に見えない大きな力」にだんだん引きずり込まれてここまできた、と語るご両人。塔の力も手伝って、コマQの活動は今日も明日も、パワフルに続いていくに違いない。

「あの塔には大きな何かが住んでいる！」

上／遠くからでも一目で分かる給水塔は、まちのシンボル。下／装飾電球が光る給水塔。夜間点灯を楽しみに待つ人も多い。（写真上下／黒田端）

左／若い世代に向けた会誌『そうとう』。デザインも斬新。右／見学会の様子。小学生たちも興味しんしん。（写真／コマQ）

*2地域風景資産
区内の魅力的な風景を地域住民と共に守り育むことを目指す「世田谷区風景づくり条例」に基づく制度。推薦・選定ともに区民と区が協働し、これまで計66カ所が選定されている。各所で区民による風景づくり活動が行われている。

*3公益信託世田谷まちづくりファンド
世田谷区の住みよい環境づくりにつながる区民主体のまちづくり活動への助成基金。平成4年設立。これまでに250を超える区内のまちづくりグループへ助成を行ってきた。助成団体の選定は公開審査会で決定される。

成城五丁目猪股庭園

人が関わることで建物に命を吹き込む

成城学園前駅に程近い、成城五丁目猪股庭園。こちらには、地域住民がボランティアで解説活動を行っている建物がある。建築家・吉田五十八の設計による旧猪股邸だ。ここは、もともと故・猪股猛氏夫妻の邸宅として建てられたもので、猛氏の長男が世田谷区に寄贈、管理を世田谷トラストまちづくりが行うこととなった。地域住民と協力してその魅力をさらに多くの人に伝えていくために、解説ボランティアの養成講座を開き、現在約70名のボランティアが案内役として活躍している。

「いろいろな人に会える、それが一番の楽しみですね。全国から見学に来る建築家や職人の方、学生などの話を聞いて、知識がどんどん増えていくのも嬉しいです」

そう話すのは、7年間ボランティアガイドを務める西尾錬吾さん。講座で学んだ知識をもとに、猪股庭園への来場者に対し、建物や庭の分かりやすい解説を心掛けている。ボランティアは月2回のシフト制だが、近所に住む西尾さんは週1回は必ず顔を出すそうだ。そんな西尾さんが吉田建築の見どころを、自然と生活を建築によって結びつけたところだと教えてくれた。見れば確かに、大きく設られた窓からの眺めは、庭の木々や自然の光すらも計算し尽くした完璧な美しさだ。

居住棟とともに、スギゴケの美しい庭と茶室を抱える猪股庭園では、イベントとして、春と秋にお茶席が開かれ、お茶を点ておもてなしをするボランティアの着物姿が華やぎを添え、生け花が建物に命を吹き込む。

「空間を引きたてるよう、生ける草花は野山に採りに入ります」

花を生けるボランティアの生塚寿恵子さんも、この場所を愛するひとりだ。普段と違うどこか活き活きとした様相の旧猪股邸を目の前にして、建築物は人が生活していくために設計されたものだと改めて実感する。

「ここがとにかく好きです！」

そんなボランティア達の声が聞こえる限り、庭も建物も決して色褪せることはないだろう。

ひとりひとりが文化遺産の守り手

今回の取材では、世田谷の人々が知恵を出し合い、いろいろな方法で様々な歴史的文化遺産を残そうと活動する姿を捉えることができた。実際に歴史的文化遺産を守る現場に立ってみると、保全している建物それ自体が、人々の生きる原動力を強く引き出していることを感じる。ある人は将来への明確な目標へと向かって前進し、ある人は知らず知らず大きな生きがいを手にしている。ひとつの歴史的文化遺産を保全するなかで生まれる数々の手の重なりは、文化遺産に学術以上の付加価値を与えているといえるだろう。

守り引き継ぐ想いを持つ人々が自分たちの暮らすまちにいるからこそ、まちの歴史的環境が維持され、人々の心や暮らしにかけがえのない豊かさがもたらされる。

私たちが暮らすいつもの風景のなかにこそ、実はなくしてはならない本当に大切な場所が隠れているのかもしれない。世田谷のまちに隠された宝物を発掘し残していくのは、ここにいる私たち、ひとりひとりにほかならない。

空間を愛する者だからこそ伝えられる魅力

1.管理の行き届いたスギゴケの庭は、見るものに安らぎを与える。特に紅葉の季節は、見事。2.吉田五十八を知る人も知らない人も、細部まで考えつくされた吉田建築の美学に感心。3.ボランティアの解説は、見学をより充実したものにしてくれる。4.庭を眺めながらのお茶席は、格別のひとときこそ。ここが世田谷ということを忘れてしまいそうになる。5.庭をそぞろ歩き。猪股邸に心を馳せる。

■当財団では、歴史的建造物の住継ぎ相談・活用相談を行っています。関心のある方はお問合せください。
☎03-6407-3313（近代建築担当）

歴史的建築をもっと身近に。それは知ることから

堀内正昭［建築史家］

漱石に会い、生徒が建物を守る

少し前のことになりますが、NHKで、漱石の孫の夏目房之助さんがロンドンにて祖父の足跡を訪ね歩くという番組がありました（*1）。夏目さんは、漱石の行った大英博物館、キューガーデン、ロンドン塔を見学したり、チャリングクロス通りではパンチ誌のバックナンバーを入手したりして、最後に漱石の下宿先を訪問します。そして、彼はその居室に立ち入ったとき、祖父に会った気分になったという予期しなかった感慨を漏らします。夏目さんは建築ならびに住空間を通して百年前のロンドンを身近に感じ、そこで祖父の確かな存在を実感しています。歴史的建築とは、それが存在するだけで意味があります。

最近では、アニメ映画『コクリコ坂から』を多くの人が見たことでしょう。さる高校のクラブハウス「カルチェラタン」、この明治に建てられたような木造3階建ての洋館が取り壊わされるということから騒ぎになりました。ある生徒は、「古いものを壊すことは過去の記憶を捨てることであり、人が生きて死んでいった記憶をないがしろにすることではないか」と声を上げます。まずはこの古ぼけた建物をきれいにすることが提案され、生徒を動員しての大掃除が開始されます。さらに、その様子を伝えるガリ版の号外が刷られます。外装にペンキが新たに塗られて修復が完了し、いよいよ理事長のところに生徒たちが直談判に行きます。理事長はカルチェラタンに来て、多くの生徒たちが見守るなか、この建物を壊さないことを決意します。生徒たちの思いの詰まった「カルチェラタン」は、今後も心を通わせることのできる場所となり続けていくことでしょう。

この映画では、生徒たちは建物の保護を訴える人々を、ガリ版は世論を喚起する役割を、掃除はボランティアの存在を意味しているともいえ、建物が保存されるという幸運な結果となります。しかしながら、そうした条件が揃わないと歴史的な建物は残らないということでもあり、今日もまた街角からひとつまたひとつと建物が消えていくのが現状です。とくに住宅の場合は厳しいものがあります。

建物を登録する制度

住宅は私達の生活環境をかたちづくり、ときに街のランドマークになっていますが、残していくには耐震性や相続税の問題が起こります。まして、所有者や周囲の人々がその価値を認識しない場合は、壊すことを前提にこれからのことを考えてしまうことになります。

では、どうすれば少しでも建物を残せることになるのでしょうか。まずは建物の存在を知ること、そしてその裾野を広げていくということです。そうした認識から制度化されたのが国の文化財登録制度です。

それは平成8年のことで、築50年以上の建物を対象に、平成23年度までの全国の登録有形文化財（建造物）の登録件数は総数3425カ所（8525件）、そのうち約半数近くの46%が住宅です。住宅の割合が多いのは、文化財の裾野が広がり、人々にとってその存在がより身近なものになりつつあるということです。ちなみに世田谷区では11カ所が登録され、そのうち住宅は9カ所で実に8割を超えています。もっと多様な建物が登録されてもよいのでしょうが、郊外住宅地として開発されてきたことを考えれば、この数字は世田谷区の特徴を示しているでしょう。

柳澤家住宅：
世田谷区内で一番新しい国の登録有形文化財
エッチング／堀内正昭

ベルリンでは公開を前提に

しかし、これは決して多い数字ではありません。先進諸外国では桁そのものが違います。

筆者は2004年に、ベルリンにおいて登録制度の実際を調査したことがあります（*2）。結論を先に明かせば、当地では所有者の承諾なしに行政が文化財登録することができ、建物の築年数の規定がありません。調査当時にベルリンでは約1万6700件の建造物が登録され、新しいものでは1980年代の建物がすでに登録されていました。

ベルリンは第2次世界大戦でまちが破壊され、1970年代、80年代の高度成長期にスクラップ&ビルドによって、多くの歴史的建築が失われたことへの反省がありました。文化財として登録してそれを公開することで、所有者がまず認識すること、前もって文化財の有無を知ってから都市計画を立案することは、都市開発上にあらかじめ制約を課すことになり、街並みの乱開発を防止することにつながるとの期待が背景にありました。

では、登録文化財の所有者は一方的な負担を強いられているのでしょうか。所有者へは優遇措置があり、なかでも所得控除が特筆できます。現行は多少変わったかもしれませんが、筆者が調査した時点では、例えば自宅の改修工事を行った場合に、要した工事費の9%を所得から控除できることになっていました。しかもその控除は10年間継続できるということでした。

ベルリン並みの制度を整えることは難しいかもしれませんが、重要なことは、当地の行政側が登録文化財のデータベース（建物種別、場所、建築年、設計者などの基本情報）を充実させるとともに、データを常に更新し、それを刊行物として、そしてインターネット上で公開するという姿勢を強く打ち出しているということです。

世田谷区への期待

世田谷区では区独自の登録制度をつくり、補助金の交付を行っています。同制度には、とくに建造物に対する年数の規制を設けていません。建物が一般的に取り壊されるサイクルを考えれば、50年以上という決まりのある国の文化財登録制度では、その前に壊されてしまうことも多いことになります。住宅を中心に豊かな資産を持つ世田谷区においては、この独自の制度に基づいて登録件数を積み上げてもらいたいと思います。

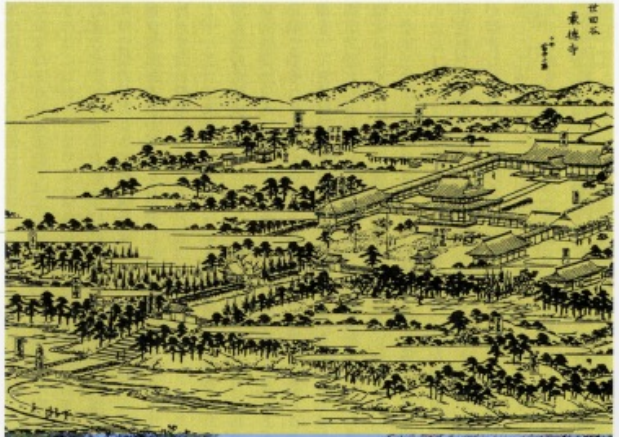
同区ではこれまで近代建築の悉皆（しっかい）調査を実施して、かなり充実した調査報告書を刊行しています。世田谷トラストまちづくりや関連のNPOの方々もまちを歩き回り、様々なイベントを行っています。したがって、今後はこうした地道な活動を一般の人々に知ってもらうという環境づくりがよりいっそう望まれます。例えば世田谷区のホームページで検索すれば、同区における国の登録有形文化財についての情報が得られるようになればと期待しています。

「知ること」と「知らせること」、それが現在の、そして明日の建築文化を守り育てていく基盤になることでしょう。

*1　NHK「心の旅セレクション：ロンドン・百年ぶりに祖父の街へ」2002年3月27日放映。
*2　詳しくは、堀内正昭「歴史的建築をいかに保護していくか～ベルリンの登録文化財の現状と課題」（昭和女子大学学苑人間文化学科特集 No.773, 59-68, 2005年3月）。

堀内正昭 HORIUCHI,Masaaki
昭和女子大学大学院教授。専門はドイツならびに日本近代建築史。
1954年和歌山市生まれ。芝浦工業大学卒業、東京都立大学大学院修了。工学博士。
1981～83年西ドイツ政府給費留学生としてベルリン工科大学、ミュンヘン工科大学に在籍。
法務省旧本館をはじめ歴史的建築の調査、保存、復元に従事。
著書に「明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン」（井上書院）、「カラー版西洋建築様式史」（共著、美術出版社）ほか。

特集 わがまちの 歴史的文化遺産



上／江戸名所図絵に出てくる世田谷豪徳寺。下／豪徳寺仏殿は世田谷区指定有形文化財。四季折々に人が訪れる。

中世の遺構が残る世田谷のまちへ

宮の坂駅～世田谷城阯公園～豪徳寺～滝坂道～山下駅へ

中世には世田谷の中心だった世田谷城、
招き猫で有名な豪徳寺、江戸と府中を結んでいた滝坂道。
そして歴史と現在を上手に結びつけている商店街の活気に触れ、
駅構内にある情報発信基地がゴールの約2時間の散歩。
案内はまちの歴史を伝える豪徳寺案内人の原島和男さん、
「豪徳寺駅周辺風景づくりの会」の青野達司さん、そして商店街の活性化を進める
豪徳寺商店街理事長の上保昌布さんにお願いした。

せたがや 散歩日和 第18回

室町時代の要塞

宮の坂駅から城阯公園へ

ガタンゴトン。電車が通り過ぎる脇で、のどかに猫があくびをしている。世田谷線にはそんな風景がよく似合う。宮の坂駅前広場には、大正14年（1925）に製造された玉電時代の旧車両が停まっている。今回は、ここから出発。なんとなくこのクラシックな電車に乗って出発するような気分だ。

豪徳寺の案内人、原島和男さんがやってきた。原島さんはかつてあった玉電豪徳寺前駅近くで、「やなぎや」という酒屋を営んでいた。

「子どもの頃、豪徳寺へは、とんと行かなかったね。店をやめてから、歴史に触れてあらためて惚れ直しまして」と笑う原島さん。

宮の坂駅の目の前に見える森は世田谷八幡神社のみどりだ。神社の創建は、古く寛治元年（1087）。境内には立派な土俵があり、江戸時代には豊穣を祈願した相撲が執り行われ、「江戸三大奉納相撲」のひとつに数えられていた。今でも、毎年9月の大祭には奉納相撲がにぎやかに執り行われる。お宮参りの家族とすれ違う。「おめでとうございます」と声をかけると「ありがとうございます」とお母さんの晴れやかな顔。昔も今も氏神様が見守ってくれている。

神社にお参りをすませ、烏山川緑道に出る。ここはかつて烏山川が流れていた。昭和9年（1934）生まれの原島さんの話からは、現在のこのあたりとはまったく違う情景が浮かんでくる。

「川の水は透き通っていて、ハヤやフナが泳いでいたよ。でも水もよくあふれてね。店が水浸しになったんだ」川には小さな橋がいくつも架かっていた。清涼橋は、原島さんの記憶によると小さな木の橋で夏の夕方は縁台が出て、将棋などを指している光景が見られたという。

橋の名前が刻まれた石柱を見ながら暗渠化された遊歩道を歩く。烏山川の支流と合流していた場所で緑道から離れて左へ進むと、世田谷城阯公園が見えてくる。

ここは世田谷区唯一の「歴史公園」で「東京都指定旧跡」にもなっている。小高い丘（土塁跡）や小さな谷（空堀跡）があり、春には桜が咲く場所だ。石垣の上に立つと、住宅の向こうに、三軒茶屋のキャロットタワーがよく見える。

延文5年（1360）頃に吉良氏によって築城された世田谷城は、烏山川という天然の要害を巧みに利用した場所に造られた。以後230年間にわたって世田谷を統治した吉良氏の領地がこのあたり一帯だったというわけだ。これから行く豪徳寺にも城の土塁が残っており、室町時代にはここまで城内であったことをうかがわせる。遠くまで見渡せたであろうこの土塁跡には、今立っているところにも兵が見張っていたのかもしれない。

1.区内唯一の歴史公園、世田谷城阯公園内の空堀跡。今は静かな時が流れる。2.烏山川に架かっていた橋の名前が刻まれている。3.豪徳寺参道の松並木。うっそうとして時を感じる。4.招き猫たちの前には、笑顔で観光客を招く原島和男さん。5.宮大工の遊び心。三重塔の猫を探してみよう。6.周囲のみどりとの調和が美しい三重塔。

上／宮の坂駅前広場の玉電旧車両。昭和44年（1969）まで活躍したデハ80形。中／世田谷八幡神社。新旧の鳥居が人々を迎える。下／境内にある土俵。力士が力比べをしたという力石も置いてある。

世田谷線宮の坂駅前広場

【せたがやせんみやのさかえきまえひろば】

1987年に開催された『世田谷線宮の坂駅・界隈づくりコンペ』で宮坂区民センターとともに設計された駅前広場（1990年完成）。コミュニティ施設だけでなく駅前空間の設計、それを含めた周辺まちづくりの提案も求めるという当時では珍しいコンペだった。高校生から70代の高齢者まで全国から242点もの作品が集まった。

世田谷の吉良氏

【せたがやのきらし】

室町時代初期に奥州探題を勤めた奥州吉良氏は、その後世田谷に本拠を置き、「世田谷吉良氏」と呼ばれるようになった。区内には、寺社など吉良氏ゆかりの地が随所に存在する。桜一丁目にある勝光院は吉良氏の菩提寺であり、墓所には明暦3年（1657）以降の吉良家代々の墓が置かれている。

【出典】
p10右上　『世田谷の歴史と文化―展示ガイドブック―』
世田谷区教育委員会　発行／平成4年3月31日

猫が縁を結んだお寺

城阯公園から豪徳寺へ

城阯公園を出て城山通りを宮の坂駅へ少し戻るように歩く。今歩いている住宅街は、室町時代にはすべて城内。これから向う豪徳寺内の本殿には吉良氏の館が建っていたそうだ。右手に石造りの門が見えてくる。曹洞宗大谷山豪徳寺だ。そそり立つ松並木の参道を進むと立派な山門が出迎えてくれる。「この松並木は、馬が通りやすいように、根が横に張らない彦根藩の松なんです」と原島さんが教えてくれた。静寂な空気に包まれる境内。ここからは原島さんの目が俄然輝く。

「豪徳寺は、このあたりに鷹狩りに来ていた彦根藩主の井伊直孝を手招きした猫の『たま』によって雷雨を免れたという言い伝えが残るお寺です。これがご縁で、井伊家の菩提寺となりました。境内には『桜田門外の変』で暗殺された井伊直弼の墓をはじめとして、井伊家の墓が建立されています」みるみるうちに観光客らしいご婦人方が集まってきて耳を傾ける。原島さんはすっかりガイドの顔だ。

願い事が叶うと奉納される招き猫。境内の招福殿には、ずらりと並んだ猫が手招きしている。

「平成18年（2006）に完成したばかりの三重塔にもよく見ると遊び心が隠れていますよ。木彫りの十二支の他に猫もいる。探してみてください」惚れ直しただけのことはある。たくさんの豆知識が湯水のようにあふれ出る。

豪徳寺の山門を出て左へ。寺の敷地沿いを歩く。左手には、どこまでも続くお寺の塀。右手には現代の住宅が何棟も建ち並ぶ。まるで時代のはざ間を歩いているようだ。当時のお寺の権勢に思いを馳せながら古道「滝坂道」に出る。

まち中を貫く歴史ある道

滝坂道から豪徳寺商店街へ

この道は甲州街道ができる以前からあった江戸と府中を結ぶ道だ。右へ行けば江戸、左は府中。道が直角に曲がり、角でお地蔵様が出迎えてくれる。ここからは2人目の案内人、「豪徳寺駅周辺風景づくりの会」の青野達司さんだ。

「ここで道が曲がっているのは、敵が攻め込んできた時にまっすぐだとすぐに敵が到着してしまうためです」青野さんたちは勉強会やまち歩きなどを行い、身近な風景を守る活動をしている。お地蔵様の前を左に折れ、世田谷線方面へ向う。住宅の壁には、青野さん手づくりの「滝坂道通信」の壁新聞が貼ってある。この通信を見て滝坂道を踏破した人もいるそうだ。毎月楽しみにしてくれている近所の人も多いという。

「普段何気なく通っている道が、歴史ある道だったと知った時には僕もそうでしたが、新鮮でした」と青野さん。

すでに日常の一部となっている場所でも、こうしたツールがあればその来歴を知ることができ、自然にまちへの愛着が感じられてくるのではないか、と思った。

歴史とまちのコラボ

豪徳寺商店街から山下駅へ

線路の手前を右に折れると、豪徳寺商店街のキャラクター「たまにゃん」が迎えてくれる。豪徳寺商店街や、その先の山下商店街には個人商店がまだ多く残っている。現在ではほとんど姿を消しているが、かつては、映画『三丁目の夕日』に登場するような出桁造りや看板建築といった風情ある商店建築が多かったそうだ。

豪徳寺商店街理事長の上保昌布さんが豪徳寺とのつながりを話してくれた。「三重塔が完成し、落慶法要をした時に、商店街の皆で駐車場の誘導をお手伝いしました。これがきっかけで商店街のイベントの際に、お寺で落語会を同時開催するなどのつながりが続いています」地域の歴史や特徴を活かすことで、商店街の活性化にもつながっているのだ。買物をして、少し歩き疲れたら、商店街の「お休み処」で休憩することもできる。

昔ながらの魚屋や活気ある商店を見物しながら歩いているとやがて、小田急線の高架下の「豪徳寺」駅に出る。高架をくぐり左にある山下商店街の一番奥、駅構内にある「たまでんカフェ山下」が今日のゴールだ。コーヒーを飲みながら、世田谷線グッズの購入や、豪徳寺・山下の地域情報を入手できる。

世田谷にかつてあった中世の城郭、江戸と府中を結ぶ街道、そして豪徳寺と猫との不思議なご縁が商店街にも活気を導いている。歴史が今も息づき、土地のもつDNAがまちの新田のモノを結びつけている。そんなことを感じる散歩道だ。

1. 直角に曲がる滝坂道の角で道行く人を見守ってきたお地蔵様。2. 壁新聞「滝坂道通信」を毎月書いている青野達司さん。3. 空き店舗を利用した商店街のお休み処。4. お休み処で、豪徳寺商店街理事長の上保昌布さん。「食べ物を買ってひと休みもできます」

たまでんカフェ山下

【たまでんかふぇやました】

世田谷線沿線の地域情報を発信する場所として世田谷線山下駅構内に2010年9月にオープンした。地域活動を行う住民を支援する「NPO法人まちこらぼ」が管理運営し、気軽に立ち寄れるカフェやギャラリーを併設。地域住民のアーティストの作品や世田谷線グッズなども購入できる。http://machicollabo.net/

豪徳寺駅周辺風景づくりの会

【ごうとくじえきしゅうへんふうけいづくりのかい】

世田谷区風景づくり条例に基づく「せたがや地域風景資産」に選定された「古道・滝坂道」と「歩いて楽しい北沢川緑道(豪徳寺一丁目)」。これらを核とした豪徳寺駅周辺の風景づくり活動を2008年から行っている。身近な風景の魅力を啓発する「滝坂道通信」発行のほか、まち歩き、北沢川緑道の将来を考えるワークショップ等を地域で重ねている。

烏山川緑道

【からすやまがわりょくどう】

世田谷区では1969年以降、暗渠化されていく中小河川上部を有効利用する方法として緑道造成に力をいれてきた。烏山川緑道は延長約7kmで、区内16ある緑道の中で最長。環八「蘆花公園前」の交差点あたりから出発し、三宿二丁目付近で北沢川緑道と合流。その先は、目黒川緑道～目黒川となり、天王洲アイル駅付近で東京湾に注ぐ。

手から手へ
人から人へ
結び葉
第8回

人やモノを結び安心で住みやすいまちにしたい
大江亮一さん

「みどりくん」を使用している地元の生産者の畑に立つ大江亮一さん。

公園づくりのワークショップで地域づくりに開眼

環状八号線にほど近い桜丘四丁目界隈。ここには、2003年にオープンした「世田谷区立桜丘すみれば自然庭園」がある。個人の屋敷跡で、自然解説員が常駐するユニークな公園だ。地域住民と行政が一体となって管理・運営を行う2000坪余りの園内は、元々いた生き物が大切にされ、季節ごとの虫や花などが、訪れる人を楽しませている。開設前に世田谷区都市整備公社まちづくりセンター(現・世田谷トラストまちづくり)が行った、住民参加のワークショップに大江さんは参加した。

ここを公園として開くにあたって、どんな場にしていきたいのかを参加者で話し合った。それはまた、大江さんたちメンバーが培ってきたコンセプト作りや、ロゴマークなどの統一されたデザインのアイデアがおおいに活かされる場でもあった。こうして「育てる」「調べる」「見守る」をキーワードとする公園が開園し、大江さんは地域づくりに開眼した。

現在では、「桜丘すみれば自然庭園」を支える住民グループ「世田谷すみれば・ネット代表」、「桜丘一丁目町会副会長」、そして「じゅんかんチャレンジ桜丘推進協議会会長」へと活動の場は広がっている。「人生、二毛作、三毛作だよ」と笑う大江さんだ。

まちの中を循環する仕組み「じゅんかんチャレンジ」

活動のひとつ「じゅんかんチャレンジ桜丘」は、地域から出た生ごみを肥料に変えて、地域の農家に使ってもらって野菜を作り、収穫後に地域で消費する取り組みだ。生ごみは東京農業大学の専用施設で、同大学の後藤逸男教授が開発した「みどりくん」というペレット状の生ごみ肥料に姿を変える。

この地域には小中学校、大学、生産者とこの取り組みにかかせないものが何もかも存在している。それらがつながることで、地域を循環する仕組みができる。今から2年前、大江さんは地元の桜丘中学校へこの話を持っていった。おりしも中学校は教育委員会が推薦する「学校エコライフ」に取り組んでおり、学校から出る給食の生ごみを肥料に変える取り組みは、待っていたようなタイミングでの企画だった。

こうして桜丘中学校の給食生ごみは道一つ隔てた東京農業大学リサイクル研究センターに運び込まれることになった。毎日15時過ぎに中学校の美化委員が給食生ごみを運んでくる。生徒自らが運ぶことで環境に対する意識を持ってもらう。これもまた大江さんの提案だ。生徒たちが運んだ生ごみは「みどりくん」に姿を変え、地元の農家が「みどりくん野菜」を生産する。2011年12月にはJA世田谷目黒に働きかけて、「じゅんかん経堂日曜朝市」を開催した。「みどりくん野菜」は大人気で、あっという間に完売だったという。まちに「じゅんかん」の輪ができあがった。

こういった朝市などのイベントでは、積極的に地元企業やお店に協賛や協力を呼びかける。そして景品などを提供してもらうことで、また新たな人のつながりが生まれてくる。ここにも広告代理店でのノウハウが生きているのだ。

いざという時の結びつきを自分たちで考える

「経堂×宮坂×桜丘スタンプラリー」も大江さんが関わった活動のひとつ。元々は世田谷区経堂出張所管内8つの町会の地域情報マップ作りがきっかけだった。町会の枠を超えて集まったメンバーが、自分たちのまちだけでなく、隣のまちも知ってもらい、お互いの理解を深めようと、2010年に始めたのがスタンプラリーだ。昨年一昨年とも、250名を上回る参加者があり、大盛況。窓口になった経堂出張所の岩元千秋さんは「大江さんは打ち合わせでも、要求ではなく提案をしてくれるのでワクワクします」と話す。知恵も労力も惜しまず提供することで、役所や町会も心が動かされているようだ。

大きな災害が絵空事ではなくなった今、いざというときに町会の枠を越えた結びつきがあれば、足りない部分を補い合える。農地は避難場所になる。大学生には一人暮らしの高齢者を助けてもらえる。町会も生産農家も、大学もすべては地域の資産。それらを結ぶことで以前にはなかったパワーを生み出す。大江さんはその留め金のような役目を果たし、人やまちを結びつける「絆」の大切さを教えてくれる。

学生時代に東京に出てきた時、このまちの近くに暮らしたことがあると話してくれた。今よりもずっと畑が多く、朝もやの中をバスが走っていく光景をよく覚えているという。桜丘のまちの魅力と価値は、きっとこんな風景にある。このまちの価値を知っている大江さんの“仕掛け”には、まちを考えるヒントがたくさん詰まっている。

「考えたことがひとつのカタチになって人の輪がひろがると、うれしいんだよね」と、今日も新しいつながりを楽しんでいる大江さんだ。

1.「じゅんかん」の大切さを桜丘小学校で子どもたちに伝える大江さん。2.給食生ごみを農大へ運ぶ桜丘中学校の美化委員。3.生ごみはペレット状の肥料「みどりくん」に変身。4.地元の生産農家で肥料として使われ、おいしい野菜が採れる。5.「じゅんかん経堂朝市」では「みどりくん野菜」はあっという間に完売。6.みずみずしいニンジンやカブ。農家の野菜スタンドにも、「みどりくん野菜」が並ぶ。

結び葉 column

【大学のなかも「みどりくん」で「じゅんかん」】

現在、東京農業大学リサイクル研究センターの生ごみ肥料化プラントでは、大学の食堂から出た生ごみを含む1日約400kgを「みどりくん」に変えている。野菜はもちろん、麺作にも「みどりくん」を使用してみたところ、おいしさを示す食味値が高いお米が収穫できた。「みどりくん米」と名づけられ、大学内の食堂のご飯にも使用されている。地域だけでなく、大学内でも「じゅんかん」している「みどりくん」なのだ。「みどりくん米」は農大内の生協で2kg880円で購入できる。

子ども生きもの探検隊

野鳥・川 冬編

鳥隊長、加藤衛さんと行くある日の兵庫島公園

みんながいつも散歩したり遊んだりしている公園には、たくさんの生きものたちがくらしているんだ!
今回は、多摩川と野川が合流する兵庫島公園で、鳥隊長加藤さんが、生きもの発見のコツを教えるよ!
カワセミ、アオサギ、チョウゲンボウなど、たくさんの野鳥に出会えるかも!
さぁ!みんなも家族や友だちとさがしに行こう!

準備

鳥がいるところ

- 水辺
- 空
- 高い木の上
- 実のなる木がたくさんあるところ
- グラウンドや草地

コツその1
鳥をみつけたら、目は鳥をみたまま、双眼鏡をゆっくり目もとに持ってきて、ピントを合わせてみよう!

まずは自分の目で!
耳で鳴き声のするほうもチェック!

ハクセキレイ

ハクセキレイは首の下にエプロンをしているんだよ

コツその2
鳥は形、大きさ、歩き方、飛び方、もよう…
じっくりみると
おもしろい特徴があるよ

隊長加藤さんのグッズ&スタイル

鳥の特ちょうを調べる「ずかん」
遠くの鳥を見る「ぼうえんきょう」
見つけた鳥を記ろくする「ノート」
近くの鳥を見る「そうがんきょう」

「ぼうし」
動きやすい「くつ」

川の近くではいつもより あたたかい服そうでね!

水辺

アオサギ

アオサギ カッコイイね!

アオサギはつばさを広げると 1.6メートルぐらい あるんだ。 サギの中でも 一番大きいんだよ!

隊長! カルガモ3羽 発見!

コサギ

カルガモ

コガモ

コツその3
水辺には、魚を食べる鳥、川岸の草や藻を食べる鳥、水面近くの小さな虫を食べる鳥…
エサをさがしにいろいろな鳥があつまるよ!

コツその4
コサギはエサとりの名人。
仲間があつまってきたら、
魚などがたくさんいる証拠。
カワウなどの他の鳥たちもあつまってくるかも!

川が合流するところ

コツその5
野川が多摩川に
合流するあたりでは、
一年を通して
カワセミに出会えるよ!
岸辺の枝や石の上で
小魚をねらってダイビング!

カワセミ

ティーという
高い声が聞こえたら、
カワセミかも!
みんなもたんけん
してみてね!

グラウンド・草地

コツその6
土や草のあるところでは、
小さな昆虫、クモやミミズなどを食べる鳥が
ピョコピョコ歩き回っているよ。

タヒバリ

高い木の上や木がたくさんあるところ

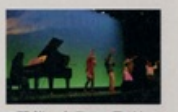
チョウゲンボウ

モズ

トラまち topics

トラストまちづくり課の下半期（2011年9月から2012年3月まで）のトピックスをご紹介します。

「世田谷トラストDAY」を開催



トラスト会員の方々への活動報告や交流を目的に「世田谷トラストDAY」を12月17日（土）に開催。当日は、子どもから大人まで約100名の参加がありました。中村桂子氏の「みどり豊かな自然の中で生きる大切さについて」のミニ講演、音楽朗読劇「リトル・ツリー ～森で小さな木が成長していく物語」上演のほか、ボランティア活動紹介や自然素材クラフトコーナー、トラスト保全地の展示なども行ないました。

財団発行「参加のデザイン道具箱」が「自治体まちづくりグッズ賞」優秀賞受賞

日本都市計画学会が創立60周年を記念して行なった「自治体まちづくりグッズ賞」に「参加のデザイン道具箱」が優秀賞に選ばれました。この賞は、自治体などが制作した都市計画やまちづくりのグッズを対象に、市民にわかりやすく伝える工夫があり、市民との間をつなぐ役割を果たしてきたものに対して学会がその成果を表彰するものです。

財団発行図書としては「まちづくりQ&A No.4「街と建物」」も佳作に選ばれました。

世田谷区長が「地域共生のいえ」を訪問

10月19日（水）世田谷区長保坂展人氏が「地域共生のいえ」を視察されました。視察したのは、「茶論（ちゃろん）ONECOIN」と「岡さんのいえTOMO」の2カ所。オーナーをはじめ活動に携わる地域の方々の話に熱心に耳を傾けている姿が印象的でした。最後には応援メッセージもいただき、活動グループにとっても私たち財団職員にとっても活動の励みとなった一日でした。

世田谷まちづくりファンド「災害対策・復興まちづくり部門」を新設

当部門は東日本大震災を受けて、新設しました。すでに被災地などで活動する区内グループがその活動を通じて、復興まちづくりに学び、世田谷で起こりうる大災害などへの対策を市民サイドから提言してもらうものです。3月3日（土）三茶しゃれなあどで開催した公開審査会では、10グループのうち4グループの助成が決定しました。活動内容は活動成果発表会などでお知らせしていく予定です。

瀬田四丁目広場 旧小坂家住宅の公開再開

建物の耐震補強工事で閉鎖していた旧小坂家住宅が1月4日（水）より一般公開を再開しました。同施設は崖線沿いに立ち並んでいた別邸建築のなかで唯一現存する、歴史的文化的価値の高い建物として区有形文化財にも指定されています。今回の工事では、内・外観の意匠はそのままに、壁内で合板補強、天井裏でつなぎ梁を増やすなどの補強が行われました。修復された旧小坂家住宅へ、ぜひお出かけください。

北烏山九丁目屋敷林市民緑地イベント「節分・豆まき大会」開催

2月1日（水）、北烏山九丁目屋敷林市民緑地にて「烏山みずとみどりの会」との共催による「節分・豆まき大会」を行ない、たくさんの親子に参加いただきました。蔵などが残る旧家の庭で「鬼は外、福は内！」子どもたちの大きなかけ声とともに、赤鬼や青鬼に向かって勢いよく豆をぶつけて鬼退治！自分で作った色とりどりのお面をつけて、ちびっこ鬼たちが緑地内を駆け回り、大変賑やかな1日となりました。

「世田谷まちづくり交流会」を開催

10月29日（土）まちづくり活動グループの学びと交流を目的に「世田谷まちづくり交流会」を開催。前半では、「仕事のスキルを活かしたサービス提供」などの助成事業を運営する「サービスグラント」と、その支援を受けた「野沢三丁目遊び場づくりの会」の対談。様々な質問が会場から投げかけられ「人材・資金含めひとつの解決方法を提示してもらった」という感想が聞かれました。後半は、テーマにわかれて交流会を行ないました。

世田谷トラストまちづくり大学公開講座を開催

2月11日（土）「地域の絆」を育む場所について考えることをテーマに、前半は愛知産業大の延藤安弘先生による「まちの縁側づくり」のお話と地域共生のいえのオーナー、サポーターによる活動紹介がありました。後半のワークショップでは、人が出会いつながる場とはどんな場所か、参加者各自で考え表現し共有しました。「おむすび処」「食べり場しゃべり場」「地域の灯り端」など、様々なコトバで地域共生のあり方を描くことができました。

「自然を楽しむ暮らし方」展 “糸つむぎ体験!”

10月より2カ月間、ビジターセンターで、「染める」「編む」「飾る」など自然を取り入れた暮らしの楽しみ方を紹介する展示を行ないました。地域共生のいえ「あかねこうぼう」のご協力により、工房の多くの作品をお借りして展示を行ないました。また、糸つむぎの実演では、小さなお子さんから年配の方まで、幅広い年齢層の方が、普段みることのない、糸をつむぐ様子に見入っていました。

※当財団の事業については、財団ホームページでご覧いただけます。 http://www.setagayatm.or.jp/

new 他課からのお知らせ

このコーナーでは、住まいづくり課と管理課の情報をお知らせしていきます。

報告

区営住宅の「地域コミュニティサポート」事業として消防訓練などを実施

住まいづくり課では、区営住宅の管理を行なっています。その一環として区営住宅自治会とまちづくりグループなどが連携し、居住者同士や地域住民とのコミュニティ促進を図るための「地域コミュニティサポート」を実施。毎年、区営住宅内集会室で、音楽会や健康体操などを開催しています。また、居住者の防災力を高めるための防災サポートとして消防訓練・防災教室も各住宅で実施しています。

今年度は健康体操を3住宅、紙芝居を1住宅、消防訓練・防災教室を21住宅で実施しました。

募集

せたがやの家 先着順入居者随時募集

せたがやの家（中堅所得のファミリー世帯向けの公的住宅）では、先着順にて随時申込みができる物件があります。世帯の所得に応じて、家賃の一部が助成され、礼金・手数料・更新料も無料となります。申込資格や物件詳細については、下記ホームページより、「せたがやの家先着順募集物件一覧」をご覧ください。詳しい内容については、下記担当までお問合せください。http://www.setagayatm.or.jp/housing/index.html

せたがやの家担当　03-6407-3302

三軒茶屋駅直結のキャロットタワー駐車場をご利用ください

財団では駐車場事業の収益を環境共生や地域共生の理念に基づくまちづくり事業などを進めるための重要な資金として活用しています。キャロットタワー地下2・3階駐車場は、最大261台を収容し、有人管理で万全のセキュリティを完備。世田谷パブリックシアターでの観劇に、お買いものに、お食事に便利です。ぜひご利用ください。

営業時間　7:00～23:00　年中無休

駐車料金　30分／250円（早朝150円）

駐車場については下記にお問い合わせください。

キャロットパーク管理室　03-5486-2311

あなたもぜひ、トラスト会員に！

世田谷のみどりや歴史を守り育て、次世代に引き継ぐ「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト会員になりませんか。

会員種別と年会費

- 個人賛助会員：1年会員 1口1,000円　3年会員 1口3,000円
- 家族賛助会員：1年会員 1口2,000円　3年会員 1口6,000円
- 法人賛助会員：1年会員 1口10,000円　3年会員 1口30,000円
- 子ども会員：小学校在学期間1,000円
- 学校会員：無料　※区内の小中学校が対象

会員特典

1 会員証発行 ※学校除く

2 情報誌「ひと・まち・自然」等の送付 ※希望者に送付します。情報誌等は財団HPからもダウンロードできます。

3 事業協力者からのサービス提供 ※詳しくは当財団までお問合せください。

提携美術館インフォメーション

トラスト会員の方は、優待制度がご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館 ☎03-3415-6011	「福原コレクション　駒井哲郎 1920～1976」 4月28日（土）～7月1日（日）
世田谷文学館 ☎03-5374-9111	「手塚治虫展」（予定） 4月28日（土）～7月1日（日） 「宮崎駿が選ぶ50冊の直筆推薦文展」（予定） 7月21日（土）～9月17日（月・祝）
静嘉堂文庫美術館 ☎03-3700-0007	「静嘉堂文庫創設120周年 美術館開館20周年記念 受け継がれる東洋の至宝」 Part1 東洋絵画の精華―名品でたどる美の軌跡 4月14日（土）～6月24日（日） Part2 明治の美術と書籍（仮） 9月22日（土）～11月25日（日）

＊展示内容など、詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄付のお礼

2011年9月1日～2012年2月29日までに、会費と一般寄付で、総額4,022,787円のご寄付をいただきました。どうもありがとうございます。今後も引き続きご支援の程、よろしくお願いいたします。

エコポイント環境寄附について

当財団は、国の「エコポイントの活用によるグリーン家電普及促進事業」及び「エコポイントの活用による環境対応住宅普及促進事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができるようになりました。
詳細については、当財団までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

せたがやの宝物

サワガニ

【サワガニ科】

小さな体に大きな「愛」を持つ子煩悩な水辺の住人

森のなか。足元をちろちろと流れる湧き水をふと覗くと、見つけたのはサワガニ。この小さな遊び相手を友だちに、飽きることなく日がな一日沢でのんびり過ごす…、そんな少年少女時代の記憶を懐かしく思い出す人はいませんか？

一生を通して淡水で過ごすサワガニは、日本でしか見られない生き物で、本州・四国・九州でその小さな愛らしい姿を見ることができます。住んでいる場所によって、赤、青白、黒など様々に体色が違うというのも、不思議な特徴のひとつです。

特徴といえば、その育児スタイルもかなり独特なもの。まず母親は、産卵した卵を数十個、腹脚に抱えて孵化するまでしっかりと保護します。そして待望の卵の孵化、産まれた子ガニがさて歩くかと思いきや…なんと母親のお腹にぴったりとくっついたまま。これではカエルや鳥といった天敵も、子ガニに指一本触れることはできません。サワガニの卵は直径2㎜程度と大きめで、その数は他のカニに比べ少なめだそう。少なく産んで大切に育て上げる…、大事な子孫を残すため編み出されたとても感慨深い子育ての方法ですね。

ところで、サワガニはきれいな水辺に棲むことから、指標生物になっています。世田谷でサワガニが見られる成城三丁目緑地や大蔵三丁目公園は、まだまだ湧水が豊かであるという証拠。世田谷の水とみどりは、これからもたくさんのかけがえない命を育んでいってくれるでしょう。

上／サワガニの姿をみつけたら、そこは水がきれいだという立派な証拠。下／水辺の小さな生きものは、子どもたちにも大人気。いつまでも続いてほしい風景。

ひと・まち・自然
トラまちPress Vol.8 2012年3月発行

発行／財団法人世田谷トラストまちづくり
編集／財団法人世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311、3313 Fax.03-6407-3319
http://www.setagayatm.or.jp/

編集協力
松井編集室

取材・文
大木茉莉（p2〜7／p20）
小池良実（p10〜13／p14〜15）

イラスト
来迎純子（表紙／p20）
南 樹里（p13）

デザイン
camps

写真
佐藤隆俊（p2〜p7）
松井晴子（p5）

©財団法人世田谷トラストまちづくり
2012 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。

世田谷区が進める「世田谷みどり33」に連携し、みどりの保全・創出に取り組んでいます。